

そばかす糸目はのんびりしたい

公爵令息は美麗冒険者に一途に愛されています



ケラブノス公爵

ユージンの父で、隠居生活満喫中。
苛烈な性格とは裏腹に、
ユージンを溺愛している。

ローレンス

ユージンの兄で
ケラブノス次期公爵。
年の離れた末弟の
ユージンには
過保護になりがら。

ルイ

ローレンスの息子。
平凡な年下の叔父に
素直になれず……

ネオ

「青き閃光」のメンバー。
ヒョウの獣人で、
ユージンの特性を
マタタビ扱いして
楽しんでいる。

リヒユテ

「青き閃光」のメンバー。
体格に似合わぬ
大人しい性格で、
ユージンたちを
見守っている。

ユージン

ケラブノス公爵家の末っ子。
王城で文官として働いており、
本人は平穏な暮らしを望んでいるが
よくトラブルに巻き込まれている。
人外を無自覚に惹きつける体質を持つ。

サーフェス

高貴な雰囲気纏う、
美麗の冒険者。特級パーティー
「青き閃光」を率いる実力者で、
幾度となくユージンを
窮地から救い、護り抜いている。

Characters

第一章 出立

建国の功労者であり、王家のよき隣人であるケラブノス公爵家。

齢七十の当主も若かりし頃は、家門が持つ「雷鳴」の二つ名の通り、苛烈だったという。

現在は家業のほとんども長男に任せ、屋敷の離れで隠居生活を送っていた。

余生を楽しむただの好々爺だ。

豊かな白髪をオールバックにし、顎ひげを逆三角形に整えた当主は、いつになく眼光鋭く末息子と向き合う。彫りが深い相貌は、年老いても美麗さと意志の強さを窺わせた。

「ユーちゃんも一緒にダラダラしよう」

黙っていれば威厳があるのに、口を開けばこれである。

リビングの窓際に置いてある一人掛けのソファーにお互い腰掛け、こちらに迫る父親の顔から逃れるため、ユージンは背もたれに体を預けた。

「のんびりしたいのは山々だけど」

許されるなら、日がな一日、屋敷の美しい庭を眺めながらボーっとして過ごしたい。いや、現状、

他ならぬ当主から許されているのだけけど。

庭園に面した大きな窓からは、草丈の短いクロッカスが紫やオレンジ、白色といった楕円の花弁を開き、咲き誇っている様子が窺えた。穏やかな秋の陽光に、手招きされている気分になる。

ユージンは軽く頭を振り、庭園の反対側にいる悪例へ、ちらりと視線を向けた。

母親が、部屋の中央にある三人掛けのソファーで寝転んでいた。

父と子が顔を突き合わせていても、我関せず。頬杖をつき、細い目で弧を描きながらクッキーを頬張っている。手元には最近ハマっているらしい恋愛小説があった。

結婚して二十キロ増えた姿は、草原で寝そべる牛そのものだ。

お楽しみシーンに、ニヤニヤする母親の顔を見ていられず、目を逸らす。

（ああはなりたくない）

母親が自堕落でも許されているのは、後妻だからだ。加えて、結婚に際し、父親に条件を出していた。「何もしない」と。

その胆力だけは凄いものである。何せ当時の母親は、辺境にある部族の中でも行き遅れだったのだから。三十六歳だった。よくもまあ、国を代表する公爵家の当主に対し、大きな顔ができたものだ。

当の父親は、ユージンの視線を追って、頬を緩めながらくつろぐ母親を見た。

（権力者の考えることって、わからないな）

結婚式は親族だけを招いた小さなものだったらしい。以後、母親は社交界へ出ることもなく、父

親と共に屋敷の離れでのんびり暮らしている。

羨ましいこと、この上ない。この上ない、が。

ユージンは、母親とそっくりだった。

そばかす顔の糸目に茶色いクセ毛は、母親の生き写しである。唯一、碧眼^{へきがん}だけ父親から受け継いだ。糸目故、傍^{はた}からは判別不能だ。そして受動的な性格も似通っていた。

未来予知の能力がなくとも、行く末は簡単に想像がつく。目の前に見本があるのだから。

(ああ、もっと僕の気が大きかったら)

母親のように図太くのんびりできたのに。

結婚の条件は、あくまで母親とのもの。息子のユージンは公爵家の慣例に従い、社交界へ参加していた。幼少から礼儀を躰けられ、貴族の常識を叩き込まれている。

結果、一般的な思考を持つようになった。

(父さんの考えも、合っではいるんだけど)

労働せず、有閑こそが貴族の代名詞。

しかし父親の現役時代も、あとを任されている長男も、多忙なのを知っていた。長男に限らずその妻も、お茶会とは名ばかりの情報収集や人脈づくりに明け暮れている。

優雅で贅^{ぜい}を尽くした生活。その裏にある一面を、公爵家の末息子として育ったユージンは無視できない。

(結局のところ、小心者なんだよなあ)

誰も自分のことなど気にしないというのに。父親を除いて。

再婚への反発はなかったそうだ。跡目が長男に決まっていたこともあり、残りの人生は好きに生きたらいい、と気にされなかった。その延長で、ユージンも空気扱いされている。

ユージンがソファアで牛のようになっていても、文句は言われない。だとしても、実行しようとは思えなかった。

(どう考えたって、心証が悪いし)

平民が槍玉に挙げる、「何もしない貴族」そのものである。

ユージンは人目が気になり、堂々と怠けられない。だから、何かきっかけさえあれば、のんびりしてやる！と考えている。

母親からユージンへ視線を戻した父親は、眉尻を下げた。

「どうしても行くのかい？ パパたちと一緒にいても、誰も文句は言わないよ？」

「仕事だから」

二十歳になるユージンは、王城で文官として働いていた。

このたび地方で問題が起こり、対応すべく上司と出張することになったのだ。

正直、目まぐるしく書類が飛び交う現場からは早く引退したい。就職を決めたのも、人目が気になる小心者故だった。成人したら職は必要だと、親友でもある悪友と共に王城で面接を受けた。

残念ながら悪友と所属は分かれたが、上司の指示通りに動けばいい配属先が性に合っていたらしく、忙しいものの同僚たちと楽しく仕事できている。

「だが、はじめての出張先がスタンピードを抱えた場所とは……さすがに荷が重すぎないかい？」
地方で起こった問題は「スタンピード」——魔物が集まって暴走する兆しがあることだった。

報告があつた時点で、当該地域の騎士が集められている。冒険者ギルドとの連携も決まっており、町の安全は確保されていた。ただ管理する人手が足りなかった。そこで現場を助けるべく辞令が下りたのだ。

父親にとって、自分はまだ半人前。ユージンも自覚があるからこそ、引けなかった。経験は積んでこそである。

「安全に絶対がないのは承知してるよ。けどここで尻込みしてたら、何のために仕事をしているのかわからないじゃないか」

危険度が低いことは、父親も理解していた。最悪、王都への伝令役と称して逃げることもできる。王都から派遣される文官には、常に免罪符が用意されていた。

それでも心配が尽きないのは、無理をしていると思われているのか。

（母さんとの結婚条件を考えれば、そうなるかな）

ユージンと母親は、容姿からして似たもの親子である。四方八方を向く茶色いクセ毛も母親譲りで、手入れが面倒なため襟足の長さで切っていた。気質も自制しなければ、すぐにでも、のんびんだらりとするだろう。

なおも、父親は言葉を重ねる。

「お前は魔力も少ない。水が合わなくて倒れたらどうする？」

「雷鳴」という二つ名が付けられるほど、公爵家は代々豊富な魔力を有し、雷魔法を得意としてきた歴史がある。前妻の子どもたちは父親からその気質を受け継いだ、ユージンは違った。

貴族が持つ魔力量の平均くらいしかなく、雷魔法も一応は使えるが人ひとりをやっとなげさせられる程度の些細なもので、戦闘では役に立たない。武官でなく、文官を選んだだけあって、腕っ節も弱かった。

「死ななきゃいいのよ、死ななきゃ」

紅茶を飲むべく体を起こした母親が告げる。

「生きてるだけで偉いの。他は情性でしかないんだから、好きになさいな」

就職を決めたときにも、同じことを言われた。

ごっこつと喉を鳴らして紅茶を飲み干すと、ユージンの返事を待たず、母親は小説の世界へ旅立つ。

「まあユージンの美しい姿勢を見て、侮る奴はおらんか。絡まれたらパパの名前を出すんだよ」

母親の言葉を受けて、父親が妙な方向で納得する。ことあるごとに父親はユージンの所作を褒めた。貴族の理想型だと。

（至って普通だけど）

可もなく不可もなく、公爵家の人間として恥じない程度のものだ。

他にこれといって挙げられるものがないのだろう。母親の一言が決め手となり、ユージンは出立の日を迎えた。

出立当日、公爵家総出で見送られる。独立している二人の兄と嫁いだ姉からは、先立つて励ましの手紙が届いていた。

（律儀なんだよなあ）

多忙の合間を縫って、節目には必ず集まってくれた。公爵家の仕来り^{しきた}なのかと思いきや、他の兄姉のときはそうでもないで、父親が声をかけているのだと思われる。次期当主である長男のローレンスをはじめ、夫人と息子の姿もあった。

ローレンスは前妻から波打つ黄金の髪を、父親からは凜々しい眉と煌めく碧眼^{きぎん}、そしてすっと鼻筋の通った端麗さを受け継いでいた。齢にして四十二。老齢の父親が情けなく眉尻を落とす隣で、苦い菓を飲み干したあのような顔をしている。二十二歳になるローレンスの息子も同じだった。夫人は整った顔立ちと動きのなさが人形のようにで感情が読めない。

公爵家の人々は、自分たち親子を除き、基本無表情だ。父親曰く、感情の起伏が表れにくいのだという。父親を見ていると本当か？ と疑いたくなるが、兄姉たちはその通りだった。にもかかわらず、今日は珍しく兄親子に表情がある。

ちなみに重たい体を引きずって出てきた母親はつまらなそうだ。こちらはこちらで、もう少し心情を隠してくれないものか。とはいえ、母親については通常運転である。

（嫌なら来なければいいのに）

いつになく感情を見せている兄親子に思う。

特に今回は節目というほどのものじゃない。はじめてではあるが、単なる出張だ。

（父さんが大袈裟に騒いだのかな）

内心、首を傾げつつ、見送りを受ける。

「着いたら手紙を書くのだぞ」

「わかったよ」

小さな子にするように、父親に頭をぼんぼんされた。父親の中で、自分は三歳児から成長していないらしい。長男家族の前で気恥ずかしさを抱えつつ、笑顔で挨拶して、公爵家の紋章が描かれた馬車へ乗り込む。母親との違いを性別以外で挙げるなら、ユージンには愛嬌があった。

軍功を意味するバラが盾を装飾する公爵家の紋章。受け継がれる容姿の華やかさも相まって、いつしかバラは公爵家を象徴する花にもなっていた。

父親をはじめ、長男家族の美麗さを思い返す。その中に交じる、茶色いシミ。

異物感が際立つが、ユージンにとって、茶色はお気に入りの色でもあった。艶やかな栗毛の馬や、乗っている馬車の車体も茶色ながら光沢があり、上質な素材であるのが一目でわかる。クセ毛ながらも手入れされた自分の髪は柔らかく、これらと同じ色だと思つと愛着が湧いた。

馬車の揺れが収まり、待ち合わせ場所に到着する。王城に隣接する広場で、普段は騎士の訓練場として使われていた。ここで一緒に出張する上司と落ち合い、飛竜によって目的地まで運ばれる予定だ。

ほどなくして上司がやって来る。白髪交じりの銀髪を後ろへ撫で付け、真っ直ぐな姿勢を保つスレンダーな姿はいつ見ても清々しい。贅肉のない女性が存在することを、ユージンは上司で知った。「おはよう、ユージンくん」

「おはようございます」

笑みを浮かべる上司は、兄のローレンスとはまた違う貫禄があった。ちなみに上司は、男爵家当主でもある。ひとえに貴族といっても、抱える背景は様々だ。

四十代後半で、ローレンスとは数歳しか変わらないものの、厳しさの中に柔和さが感じられた。普段は自分を含め、周囲を律しながらも、弱った人には優しい面を見せる。どんな問題にも臨機応変に対処する柔軟さを、ぜひ見習いたい。

「朝食は少なめにしてきたかな？」

「はい、助言通りに行っていました。飛竜による移動は、はじめてなので緊張します」

移動は馬車が一般的だ。平民も乗合馬車などを利用する。

今回は目的地が遠方な上、急を要する案件のため、飛竜の出番となった。

時には道に沿って蛇行しなければならぬ馬車とは違い、空を飛べば行程を三分の一に短縮できるのだ。ただ数が少なく、平時には飛竜のパートナーである竜騎士にもなかなかお目にかかれない。竜騎士に会うのも、これがはじめてだった。平静を装っていても、胸がドキドキする。飛竜と竜騎士の物語を知らない子どもはいない。空からの脅威に怯えずに暮らせるのは、彼らのおかげだ。

行程を上司とおさらいしておく。飛竜を受け入れられる町は限られており、予定が狂った場合は

注意が必要だった。

(念のための宿泊道具も、荷台にあるから大丈夫だろうけど)

屋敷から王城へ来るのに使った馬車とは違い、これからユージンたちが乗る荷台は、寝泊まりできるような仕立てられたものだ。そのため通常のものより床面が縦長になっている。

補給地点に着いて確認していると、ふっと、広場を影が覆った。風魔法が得意な上司が、風でシールドを張ったのと同時に地面から砂が巻き上げられる。

さらに、風圧が増す。着陸しようと飛竜が翼を羽ばたかせていた。

頭上に現れた巨体を、ユージンは口を開けて見上げる。ドシンツと地響きを感じた瞬間、飛竜から人影が飛び降りた。革製の装備で全身を覆っていた竜騎士は、地上へ立つとゴーグルを外す。

「竜騎士のカラクだ。こっちはククル」

カラクと名乗った竜騎士の頬には、一筋の傷痕があった。赤毛の短髪で、装備越しでも筋肉の厚みから体格の良さが窺える。ユージンより頭一つ分大きく、低い声音に無骨さが表れていた。

ククルと紹介された飛竜は蒼色で、行儀良く座っていても四階建ての城塔と同じ迫力があつた。食事の際には、馬一頭をべろりと平らげるといふ。

それぞれ挨拶を交わしたあと、カラクの指示に従い、外見と体臭を飛竜に覚えてもらう。

「動くなよ」

上司もユージンも貴族である上、職場での階級もあるが、竜騎士におもねる様子はない。竜騎士が出動する場合、ほとんどが急を要するため普段から礼儀は不問とされていた。

笑顔のまま表情が固まっている上司の次は、ユージンの番だ。直立不動で、飛竜の巨大な顔が近付いて来るのを待つ。人を丸呑みできそうな顎に、どうしても腰が引けてしまうものの、頑丈なウロコが連なる様や、クリツとした大きな目を認めると興味のほうが勝った。

(綺麗だ)

動きに合わせて波打つウロコに反射された光が、時折虹色を見せる。透き通った大きな瞳は琥珀色で、水のボールに覆われているようだった。

観察されていることに気づいたのか、飛竜が鼻頭をユージンの腹に押し付ける。

「わわっ」

危うく後ろへ転けそうになったところを、カラクが支えてくれた。

「ありがとうございます」

「飛竜に気に入られるとは、竜騎士の素質があるのか」

「気に入られてるんですか、これ？」

てっきり抗議されているのだと思った。ふんふんと鼻息荒く押されるたびに、転びそうになる。

「君のことがもっと知りたいという仕草だ」

「あー、動物には好かれやすい質ではあるんですけど」

子どもの頃から猫や犬を見かければ、向こうから寄ってきた。飛竜もそうなのは予想外だ。

「なるほど、たまにそういう者がいるな。ククル、あまり浮気するなよ」

ピツと笛を吹いて、カラクが飛竜へ指示を出す。パートナーの手振りに従い、飛竜は姿勢を正

した。

足を閉じ、竜騎士の動きに連動してスツと顔を上げる。逆光が飛竜のウロコを、竜騎士の装備を輝かせ、縁取る。

規律ある姿に、自然と声が漏れた。

「かっこいい……！」

童話の挿絵をそのまま表した光景が、目の前にあった。自分でも糸目がキラキラしているのがわかる。

ユージンの反応に、竜騎士は胸を張った。心なしか飛竜も自慢げに見える。

「そうだろう？」

「はい、とても素敵です！」

「ははっ、君は飾らないんだな」

心からの賞賛が伝わったのか、目元を赤く染めながら竜騎士は顎を撫でる。声の調子も軽くなっていた。

こほん、と一呼吸置いて、説明が続けられる。

「顔合わせはこれで大丈夫だ。あとは荷台に乗って待っててくれ。座ったら必ずシートベルトを着けること。予定の着陸地点までは飛びっぱなしだ。何かあるときは連絡窓へ向かって叫んでくれ」馬車の荷台には、御者台の背中側に連絡窓があった。中の人が、指示を伝えるためのものだ。

上空では風が強いため、いくら叫んでも竜騎士に声は届かないが、飛竜が気づいて竜騎士に伝え

てくれるとのこと。これから文字通り、上司とユージンは荷台ごと飛竜に運ばれるのだ。

上司と席へ着く。

「飛竜に懷かれるなんて、さすがだね」

「嫌われなくて何よりです」

「間違いない。けど今から竜騎士を目指すなんて言わないでくれよ。君がいない職場なんて考えたくもない」

上司はユージンの仕事ぶりを評価してくれていた。だから出張にも同伴することになったのである。

「安心してください。僕じゃ手綱すら握れませんよ」

腕を曲げて力こぶをつくって見せるものの、少し筋肉が動いた程度で終わる。元々運動が苦手なのもあり、ユージンは細身だ。

「馬には乗れたと記憶しているんだが」

「乗るといふより、馬に乗せてもらってる感じです」

頼りない乗り手に、馬のほうが気を遣ってくれた。おかげであまりスピードは出せない。

「文官なんてそんなもんさ」

運動が得意なほうが珍しい、と上司は言うが、どう見ても当人は鍛えていた。実際、軽やかに馬に跳び乗る姿を目撃している。

(僕も運動しなきゃなあ)

思いつつ、実行したためしがない。なんだかんだいって休日のユージンは、母親とそう変わらなかった。大体、ゴロゴロしながら本を読んでいる。付き合いで頻繁に出かける七十の父親のほうが動いていた。日々の生活を振り返れば、出張先で倒れるんじゃないかと心配されるのも頷ける。

「仕事中は走り回ってる自覚があるんですけど」

ユージンの部署は、騎士団の総括事務を担っていた。決められた予算の中で消耗品を管理し、騎士団の要望を聞くのが仕事だ。そこには経理も含まれ、騎士団から上がってきた書類の中に、不備や経費に不対応のものが含まれていた場合は、突き返さないとけない。

大きく三つに分かれる騎士団の間を、書類を持って行ったり来たりするので、自然と運動量は増えた。

「君みたいな使い勝手のいい——ごほん、優秀な部下を持てて、私は嬉しいよ」

にっこり笑みを浮かべた上司が、ユージンの仕事ぶりを褒める。

人によっては、突き返した書類をさらに突き返されることがあった。一つの騎士団ごとに事務担当はいいるのだが、あくまで騎士が本業のため、書類作成や計算を嫌う者は多い。細々としたものは、全部そっち——総括事務——の仕事だ、というのが彼らの言い分である。

騎士団のサポートをするのが事務の本分だ。しかし予算の中では、認められるものに限度があった。それがわかってもらえず、上司同士でも衝突が絶えなかったりする。

「配属されてすぐに業務をこなす姿には驚かされたものだ」

「後ろ盾のおかげです」

ユージンの場合、公爵の末息子という身分が役立った。

社交界では父親の過保護も有名で、騎士団の上役は貴族が多く、ユージンを通して父親を見る。逆に跡目を継がない貴族子息や平民からなる騎士たちは、空気扱いされているユージンに同情した。おかげでユージンが書類を突き返されたのは、身分が周知されるまでだった。

今では騎士の友人もでき、書類を持っていけば話を聞いてもらえる。

「そうやって驕^{おご}らないところが、物事を円滑に進めるのだろうね」

上司の指示にも素直に応じるため、扱いやすいと言われればその通りだった。本人にしてみれば、波風が立つ状況が苦手なだけなのだが。

ちょうど話が一区切りついたところで、荷台が揺れる。飛竜のハーネスに荷台が取り付けられたのだ。

上司が天井付近にある手すりを掴む。ユージンもそれに倣った。

「ああ、いよいよか……私は浮き上がる瞬間がどうにも苦手だね」

「飛竜に運ばれた経験がありなんですね」

「便利だけど、正直、あまり経験したくな——」

言葉の途中で、ガタガタと揺れが大きくなる。飛竜が翼を上下していた。

血の気が引いている上司を見て、ユージンも腹をくくる。

荷台が地面から離れる。飛び上がる瞬間、圧を感じた。体が、内臓が、下へ押し付けられる。

そして、一定の高さが保たれると解放され、ふわっと腹の中が浮いた。

(うっ、これは僕も苦手かも)

はじめての感覚に冷や汗が浮かぶ。高所恐怖症ではないので大丈夫だろうと慢心していた。手すりを持つ手に力が入る。到底、竜騎士にはなれそうもない。

緊張が解けるまでの間、車内に長い沈黙が下りた。

とある竜騎士の独り言

仕事内容に目を通したカラクは、面倒だ、と思った。

人を輸送するのはよくある任務だが、今回はケラブノス公爵の末息子が同乗するという。「テナチュールの花弁には指一本触れるな」と社交界で謳^{うた}われる人物だ。

竜騎士は、パートナーである飛竜と生活を共にするため、人里離れた場所で暮らし、パーティーなどには参加しない。そんな平民上りのカラクでも、謳^{うた}われる文句を耳にしていた。

貴族への礼儀を不問にされる竜騎士だが、進んで関わりたい相手ではなかった——たとえ公爵家の所屬であっても。

竜騎士の所屬は、パートナーである飛竜がどこで飼われているかで決まる。ただ希少性から、あまり仕事に所屬は関係なく、王命によって王国各地を飛び回っていた。

公爵は前妻との間にできた子どもたちより、能力の低い末息子を猫可愛がりしているという。ほ

ぼ隠居の身の上ながら、公爵の権威は未だ衰えを知らず、反感を買えば未来はない。

だが——と動かした視線の先に、飛竜ククルの姿があった。硬い鱗が光を受け、深緑にも紺青にも映る。

（舐められるのは癪だ）

自分はどう思われたっていい、元より平民だ。貴族とは生まれが違う。しかしククルは別だった。何よりも強く、尊い生き物。飼育されている飛竜の先祖は、元々山の主と崇められ、人間と共存していた種だ。やがて交流が盛んになり、背に人を乗せるようになった。

とはいえ、信頼を勝ち取らねばパートナーにはなれず、成竜になつても人を乗せない竜もいる。彼らの気高さは変わらず、人と比べるなどおこがましい。

だというのに、時折、人間社会で権威があるからと勘違いする貴族がいた。自分は飛竜より上だと。

（笑えるものだ、誰に守られている社会かも知らないで）

飛竜が、山の主と崇められていたのには理由がある。他の魔物を牽制してくれるため、人里での被害が少なくなるのだ。ただ山の魔物が減りすぎると食糧がなくなってしまう、飛竜は住処を移す。それを避けるため、人は試行錯誤しながら食糧を献上してきた歴史があった。

今も構図は変わらない。国中を複数の飛竜が飛び回ること縄張りを示し、空を活動域とする魔物の侵入を防いでいた。また飛竜がその場にいれば、食糧となる魔物は近付くのを避ける。

スタンピードの際は、魔物が興奮状態になっているため効果は少なくなるものの、群れから離れ

た魔物には効果覿面だった。だから今回も呼びがかかったのだ。

（全くもって面倒だ）

飛ぶのが、ではない、貴族の相手をするのが。

結局カラクはいつも通りに対応し、様子を窺うことに決めた。最悪、自分の頭くらい、いくらでも下げてやると。

（貴族だな）

広場の端に立つ二人を認めるなり、そう思う。堂々とした姿勢ながらも騎士のような硬さはなく、佇まいに気品があった。

（なるほど、茶色いバラか）

バラは公爵家の代名詞である。ユージンと名乗った青年が、クラブノス公爵の末息子だった。一見して看破するのが難しいほど、平凡な見た目だ。しかし小さな傷一つない肌は瑞々しく、頭から爪先まで手入れが行き届いていた。細身ながらも、どこか余裕を感じさせる姿に位の高さが現れている。きっと何も疑うことなく富を享受してきたのだろう。

ユージンの育ちに興味はないが、ククルの神経を逆撫でする行動だけは避けてくれと願う。甘えきつた貴族の息子は、相手が人間でないことを忘れがちだ。念のため、対応策を脳内でシミュレーションしておく。

が、その全ては無駄に終わった。

「動くなよ」

ぶつきらぼうな指示に不満一つ見せず、文官二人は従う。

上司のほうは以前も運んだことがあった。前もって、こちらの調子を聞いていたのかもしれない。意外にも公爵家の末息子には、気概を見せた。腰は引けているが、正面からククルと向き合う。大概は、上司のように目を瞑り、ククルとの対面が終わるのを待ち望むというのに。糸目だからわかりづらいが、ユージンはククルと目を合わせてさえた。

さらに驚いたのは、ククルが興味を示したことだ。後ろへ倒れそうになるユージンの背中を支える。

飛竜がパートナー以外に好意を寄せるのは珍しい。あまりにも懐いて見せるので、つい笛を吹いてしまった。

（お前のパートナーは俺だぞ？）

姿勢を正させると、予想外のところから黄色い声上がる。

「かつこいい……！」

ユージンは幼子が宝物を見つけたように目をキラキラさせていた。

竜好きに通ずるものを感じ、頷く。

「そうだろう？」

「はい、とても素敵です！」

「ははっ、君は飾らないんだな」

三十半ばのカラクからすれば、ユージンは一回り以上、年下だ。童心に返る姿は愛嬌があり、

もつと幼く映った。

（なるほど、ご老公が可愛がるわけだ）

同時に心配にもなる。無垢は美徳とされるが、世間知らずでは困るのだ。

差し迫った状況でないといっても、今から向かうのはスタンピードの危険があるところである。

自分が輸送するのは「補助要員」であり、「邪魔者」であってはならない。

好意的であっても、ユージンの甘やかされて育った坊ちゃん感是否めず、ちゃんと仕事ができるのかは疑問が残った。

（杞憂だったか）

予定が狂い、不時着を余儀なくされた先で、カラクは抱いていた先入観を振り払う。

いざというときのため、お互いに準備はしていた。自分の TENT を設置しながら、テキパキと荷台を寝台に変形させる文官二人を見る。そこに世間知らずのお坊ちゃんはいなかった。

一通り支度が整うと、ユージンが様子を窺いにくる。

「ククルは大丈夫ですか？」

「風に煽られただけだからな、ご覧の通りだ」

呼んだ？ と、何食わぬ顔でククルが顔を上げる。思わぬ強風に行く手を遮られたときは困った素振りを見せていたのに、地上に降りた途端、今日の仕事は終わったと羽を伸ばしていた。気楽なものだ。

空には道がないと思われがちだが、海に海路があるように、空にも飛行に適した場所があり、自ずと順路が決まった。特に人など生物を輸送している場合は無理ができないため、より安全な空路が選ばれる。山風や季節風を念頭に置いて飛んでいたのだが、相手は自然だ、毎回予定通りにことが進むとは限らなかった。

予定外に町へ近付くと、魔物の強襲と勘違いされたり、家畜が恐慌状態に陥ったりするため、不時着場所として人里は避けなければならない。結果、自然しかない場所を選ぶしかなく、一夜過ごすだけでも不便を強いられる。

というのに、文句を言うどころか、こちらを氣遣つてくる坊ちゃんとカラクは目を合わせた。

「そっちはどうだ？ 設営には慣れてそうだが」

「人手が足りないときは補給部隊を手伝うので、浅いながらも従軍経験はあるんです」

聞いて納得する。常時でなくとも、経験の有無は大きい。ちゃんと補助要員になるべく、ユージンは派遣されたのだと知る。

「ところで、僕、ククルに食べられないですよね？」

話している最中も、ククルが鼻先をユージンの頭に付けていた。ふんふんと鼻息で、茶色いクセ毛が揺れている。

「安心しろ。パートナーを持った飛竜は人間を食べない」

どれだけ飢えていても、人を食べるくらいなら餓死を選ぶ。それほど飛竜と竜騎士の間で形成される絆は深かった。

なら良かった、とユージンが上を向くのと同時に、ククルがペロリと舌を出す。

ユージンの顔面がヨダレまみれになるのを目の当たりにして、カラクは笑った。

「お腹空いてたりしませんよね……？」

「多分な」

一日予定が狂ったところで、大差はない。幸い王国は豊かな土地が多いので、食糧に困るのは、畑など持ち主がいる場合だった。

それよりも、とククルの懐きっぷりにカラクは首を傾げる。

ユージンは動物に好かれやすい質らしいが、飛竜は魔物に分類される。それこそ信頼を得るために訓練を続けてきたカラクにとっては、信じがたい光景だ。

(最初に飛竜が交流を持ったのは、ユージンみたいな人間だったのかもな)

飛竜を山の主と崇めていた時代。交流のきっかけについては諸説あり、明確な答えは出ていなかった。無条件で動物や魔物に好かれる人間がいるならば、十分考えられる。

(とはいえ、なあ)

文官として仕事はできるようだが、ユージンの印象はやっぱり頼りない。

荒事と無縁なのはその通りのようなので、ククルも庇護欲を掻き立てられたのかもしれない。

(俺らが傍にいる間は大丈夫か)

飛竜を警戒しない人間も、魔物もない。また何かあればククルが真っ先に察知した。

この世に、飛竜ほど頼りになる存在はいないのだ。

第二章 出会い

離陸と着陸を繰り返す——予定外の不時着はあったものの——一週間ほどで目的地に到着した。有事に備え、竜騎士と飛竜も一緒に滞在する。ただ町の人を驚かせてしまったため、ユージンたちを降ろしたあと、カラクたちは郊外へ移動した。

上司とユージンは、領主であるディアークノス伯爵へ着任の挨拶を終えると、それぞれ分かれた。上司は現場責任者の下へ、ユージンは一足早く用意されているホテルへ向かう。

馬車から眺める町は、活気に溢れていた。石畳が敷かれた大きな通りには果物などの商店が並び、人々の間で笑顔と怒号が飛び交う。スタンピードの兆しなど、まるでなかったかのように。

(これが冒険者のいる町かあ)

公爵家の屋敷がある王都には冒険者がいない。魔物が出る隙がないからだ。

郊外の自然豊かな場所には出沒するものの、対応するのは第二騎士団だった。ユージンも補給部隊の手伝いに行ったことがある。

他の用途でも冒険者に頼る必要がないため、王都には冒険者ギルドの支部もなかった。

折角の機会だから、時間があれば現地の冒険者ギルドも覗いてみたい。

実は就職を決める際、冒険者ギルドも候補にあった。文官の募集は多岐にわたり、商業ギルドなどもあったが、全く知らない世界へ飛び込んでみるのも面白そうだと思ったのだ。

ただ必然的に赴任先が王都外になることが予想されたので、過保護な父親が許してくれなかった。(荒くれ者が多いって聞くけど)

名前こそ冒険者と謳っているが、実情は便利屋に近い。出される依頼は魔物討伐に限らず、護衛や、植物採取、家の修理など挙げたらキリがなかった。腕っ節に自信がある平民が集まるので、ユージンのような温室育ちの人間とは水と油だと言われた覚えがある。

来る者拒まずの姿勢で窓口が広く、職にあぶれた人間の終着点でもあった。

(国としては頼らないほうがいいんだけど)

国内で完結する商業ギルドとは違い、冒険者ギルドに国境はない。国から独立した単一組織として運営され、横の繋がりが強かった。

国の傘下にある組織ではないため、場合によっては利害が合わず対立することもある。支部を引き上げると言われて困るようではダメなのだ。

しかし行政が行き届かない場所では受け皿として機能し、持ちつ持たれつの関係であるのがほとんどだった。

到着したホテルは五階建てのレンガ造りで、くすんだ風合いが歴史を感じさせた。左右対称の均整のある佇まいに、正面玄関には大きな柱で支えられたポーチがあり、三角錐を半分に切ったよう

な屋根が特徴的だった。

ロビーに足を踏み入れると、柔らかな弾力に迎えられる。一面に赤い絨毯^{じゅうたん}が敷かれ、高い天井ではシャンデリアが優雅に輝いていた。

ホワイトムスクのアロマに導かれて受付へ向かうと、スムーズに案内を受ける。ユージンが着ている制服で、身分を察されたようだ。

「一階にレストランや浴場など、当ホテルの施設が集まっております。詳細はこちらのパンフレットをご覧ください」

二階から上が客室だった。スタッフが部屋へ案内してくれる。

エレベーターを待っていると、レストランから出てくる華やかな人物が目を引いた。気づいたスタッフが、冒険者パーティー「青き閃光」のリーダー、サーフェスだと教えてくれる。

（特級クラスの冒険者だ！）

パーティー名には、ユージンも聞き覚えがあった。

上司とユージンが派遣される現地で、冒険者を束ねるのが彼らだと知らされていた。

冒険者には等級があり、特級が最上だ。

ちなみにギルド職員は、ユージンたちと共に事務を担当する。

「当ホテルは、『青き閃光』の滞在先になっております」

彼らが町を訪れる際は、必ずここへ泊まるのだとスタッフは誇らしげである。特級ともなれば当然で、彼らは平民でありながら貴族と同等の権威があった。

パーティー名の由来になっているリーダー、サーフェスの容姿にユージンは魅入られる。

（なんて綺麗な人なんだろう）

淡いレイクブルーの長髪が滑らかに揺蕩^{たゆた}い、光の帯を宿していた。長い睫毛^{まつげ}に縁取られたアメジストの瞳は気品に溢れ、男性ながらも中性的な美貌が色香を匂わせる。肌は艶やかで、荒々しいと評される冒険者とは真逆の容姿だった。

立ち姿も美しく、胸当てなどの装備品がなければ、貴族と見紛^{みまご}うほどだ。

目が合い、ユージンは咄嗟^{とつさ}に挨拶する。

「こ、こんにちは！」

「こんにちは。もしかして王都から派遣された文官の方ですか？」

サーフェスの視線は、ユージンの制服へ向けられていた。

「はい、ユージン・エウフライノーと申します」

父親の計らいで、公爵家とは別の家名をユージンは持っていた。生前贈与で公爵家の領地の一部を、子爵領として与えられているのだ。父親の死後、ユージンと母親が公爵家から追い出されても大丈夫なようにという配慮だった。

公爵家を名乗ると身元確認に時間を取られることが多いため、出先では子爵を名乗っている。如才なく綺麗な笑みを浮かべてサーフェスが片手を差し出す。

「サーフェスです。『青き閃光』のリーダーを務めています」

握手を交わそうとしたところで、黒い影が視界を遮った。

空を切った手が、叩き落とされる。

「近寄るな！『魔物の使い』が、何故ここにいる!?」

次いで怒号を浴びせられた。

しかしユー진은言葉の内容より、外見への興味が上回る。

(獣人だ)

王城で催された他国の使者を招いたパーティーで見かけた獣人は、猫が二足歩行しているような容姿だった。

獣の属性がある人間は総じて獣人と呼ばれるが、目の前に立つ男性は、属性のない人間に近い見た目をしている。褐色の肌に、クセのあるダークブラウンの髪。頭にはヒョウと同じ斑模様まだらの耳が生えていた。相貌は人間と変わりなく、眉頭に寄せられた険しいシワがなければ、大層な美丈夫だ。厚い胸板に筋肉が盛り上がった太い腕からは、野性味が溢れている。

サーフェスとは違うタイプの美形だった。

頭一つ分高いところから向けられる敵意に気圧けおされ、ユー진은半歩退く。
(そういえばパーティーのときも、遠目から睨まれたっけ)

あのときは理由がわからないまま、居心地の悪さにそそくさと退場した。

「ネオ、『魔物の使い』とは、どういう意味ですか？」

「ああ？ くそつ、わからねえのかよ！ とにかく離れるぞ」

乱暴にサーフェスの腕を掴み、ネオと呼ばれた獣人が距離を取る。

言葉の不穩さに、隣に立つホテルのスタッフからは怪訝けげんな視線を送られた。

「魔物の使い」なんて言われたのははじめてだし、自分は善良な文官で、それ以上でもそれ以下でもない。このまま放置されたら要らぬ誤解を招きかねないと、ユー진은手を挙げてネオへ訴えた。

「あの、僕も意味が知りたいです！」

「オマエはとつと部屋にでも行きやがれ！」

「ええ……」

消え失せろ！ とまで吐き捨てられる。取り付く島もなかった。

どうすることもできず、スタッフへお願いして、言われた通り部屋へ向かう。

スタッフは悩む素振りを見せたが、危険性があるなら、この場で「青き閃光」が対処しているはずで、というユー진의説得に応じてくれた。そもそも身分は保証されているのだ。

部屋には、ベッドの他に、寛くろげるようテーブルとソファも置かれていた。トイレ付きのシャワールームもあり、休息を取るには十分だ。

「ご用の際は、フロントへお申し付けください」

スタッフが退室すれば、自分一人の時間である。

クローゼットへ上着をかけて仕舞い、制服のズボンを脱ぐとユー진은ベッドへ飛び込んだ。

「『魔物の使い』ってなんだろう……？」

気にはなるけれど、ふかふかな感触を全身で享受し、瞼が下がってくる。

「青き閃光」とは仕事で会うことが決まっている。またそのときに訊ねればいいやと、帰ってきた

上司と呼ばれるまで、ユージンは惰眠を貪った。

同日の夜、無礼を謝る書状が「青き閃光」から届いたものの、「魔物の使い」という言葉の意味はわからずじまいだった。

三日後、上司とユージンは、仕事現場である町外れの砦に到着した。

砦は四方を櫓のある石壁に囲まれ、敷地内にある石造りの施設は大きな長方形のブロックを置いただけのような簡素な外観で、石壁を含めて装飾類は一切なく、優美さからはほど遠い。

ごつごつした石壁の無骨さが、ここは休暇を楽しむ場所ではなく、仕事場であり、軍事拠点であることを告げていた。

町から離れているため、仕事が終わるまでは冒険者たちと一緒に、上司とユージンも砦の宿舎で寝泊まりする。飛竜と竜騎士も滞在するため、飛竜を見慣れない現場では少し混乱が起きたが、すぐに落ち着いていた。

補給物資の管理をはじめ、前線で魔物と戦う冒険者たちをサポートするのが、ユージンたちの仕事だった。本質的には普段と変わらない。ただ相手が騎士団ではなく冒険者である分、勝手が違う。作業を進めるには、冒険者ギルドの職員に教えを請わねばならなかった。

商機を察した商人たちも集まり、砦周辺は大賑わいだ。スタンピードの初期段階で対処するのが目的のため、砦にまで魔物がやって来る心配がないのが大きかった。即席の露店が並ぶ光景に、危機感はない。

「仮に戦線から漏れた魔物がいても、ゴブリン程度だ」というのはギルド職員の言葉である。

魔物の下級クラスにあたるゴブリンは、数が多いと厄介だが、少数なら商人でも片付けられた。魔物が出没する地域で活動する商人は、冒険者でいうところの中級クラスなのが普通だ。

また洪水が起こりやすい地域があるように、ディアークノス伯爵領はスタンピードが起こりやすい地域にあたる。だから兆しも察知できた。前例があり、対処法もわかっているため、町や商人たちには余裕があった。

現場に入ったユージンは、せっせと書類をめくる。

砦の門をくぐった先にある広場には、馬車によって続々と物資が運び込まれていた。土が均され、土が均されているだけなので、今日のように晴れた日は馬車が通るたびに土煙が上がる。

物資の管理を任されているユージンは、手元にある請求書と、配達人が持つてくる納品書を照らし合わせて不備がないことを確認すると、種類ごとに倉庫へ格納してもらうよう指示を出した。

ある程度片付くと、今度は納品された物資の分配が待っている。中には保存日数が限られている食材もあり、調理部の担当者と話し合わなければならなかった。次は医療部の担当者、といった具合だ。その合間にも、馬車に木箱を積んだ配達人がやって来る。

昼休憩を迎える頃には、声がかすれていた。指示に大声を出さざるを得なかった。空気が乾燥しているせいもあるだろう。

地元の文官と交代し、やつのことで現場を離れる。

青空が広がる陽気に、んーと背筋を伸ばした。バキバキと肩が鳴る。

「疲れたあー」

現場が慌ただしいのは、王都も地方も変わらない。

昼食にサンドイッチが用意されていると聞いて、食堂を目指す。途中で上司と合流し、二人でサンドイッチを受け取った。食堂は昼食にありつこうとする人が集まって騒々しかったため、上司に与えられた部屋へ移動する。

執務机に積まれた書類は見なかったことにして、手前の会議用テーブルに落ち着いた。

水差しから二人分のカップへ水を注ぐ。カップの一つを上司に渡し、サンドイッチにかぶり付きながら、ユージンは仕事中に気になっていたことを訊ねた。

「騎士団の姿を見かけませんか」

周辺地域からも集められているはずなのに、皆では冒険者の姿ばかりが目立った。

あー、それねえ、と上司は言葉を濁す。良くない反応だ。

「どうも、ディアーコノス伯爵は、騎士団の力を温存したいようだ」

「まさか前線を冒険者だけに任せるんですか？」

魔物討伐に関しては、騎士団より冒険者のほうに一日の長がある。基本的に騎士団は、対人戦用に組織されているからだ。王都の第二騎士団が特殊だった。

とはいえ、スタンピードの兆しは、魔物の増加を意味する。

冒険者だけで人手が足りるとは限らない。

「規模は把握できてるんですか？」

「一応ね。冒険者ギルドもそれで話を呑んだって話だよ。まあ冒険者と騎士が肩を並べるのも一長一短だ」

領主に忠誠を誓い、国に属する騎士と、国境を自由に越えられる冒険者は、そりが合わなかった。要らぬ諍い^{いさか}を生むよりは、距離を置いたほうがいいときもある。

「騎士団も納得してるんですか？ 魔物素材は欲しいでしょうに」

騎士団が参加しないなら、討伐した魔物素材は全て冒険者のものになる。

また騎士たちは名誉を求めるものだ。安全な町に留まったままでは、住民から賛美は得られない。文官であるユージンでさえ、皆へ赴いているのだから。

「そのあたりは微妙だ。ただ増加している魔物のクラスが低いから、希少な素材が手に入ることはなさそうだよ」

スタンピードには段階がある。

発生条件はわからないことも多いが、伯爵領で観測されているスタンピードには決まった流れがあった。まず下級クラスの魔物が増加して群れる。この段階で数を減らせないと、下級クラスを食す中級クラスの魔物が増える、という風に。

自ずと初期段階で手に入る素材は、討伐数に応じて数は多いものの、見慣れたものだった。

「かといって何もしないのも決まりが悪いから、冒険者たちが前線へ向かう頃合いに、後方支援と

称して砦に来るんじゃないかな。今は冒険者だけに物資を割り振れば済むから、こちらとしては手間が減って助かるけどね」

「話を聞いている限り、分配で揉めそうですもんね」

王都でも、三つの騎士団の間で差が開くと大変だった。

揉めるだろうね、と矢面に立つ上司は苦笑する。こういうとき、責任ある立場の人は大変だ。

「そうそう、昼からは冒険者の間で支援物資について話し合われるから、ユージンくんはそっちに顔を出してくれる？」

「わかりました。物資に関する書類は……」

「こっちの束だね」

会議へ出る前に、現段階で集まっている物資の種類と数をまとめなければならなかった。数字が出揃っていないと、補給部隊へ回せる量も伝えられない。

「日持ちしない食物は砦で消費して、回復薬もある程度は備蓄しておかないとダメだろう」

領き、融通できる量を上司と相談しながら概算を出していく。

「土地柄、冒険者との結び付きが強いからか、伯爵からの支援物資が潤沢なのは有り難いですね」

「あー、それねえ」

「まだ何かあるんですか？」

「私たちに直接関わる話ではないけど、どうやら伯爵は『青き閃光』のサーフェスにご執心らしい」

貴族が力ある冒険者を囲い込むのは、よくあることだ。どこでも能力の高い人材は求められる。しかし上司の苦笑を見るに、一般的な理由からでないのは明白だった。

挨拶のとき、年相応に落ち着いた四十代の紳士だった伯爵を思い浮かべる。短めの黒髪をオールバックにし、鼻の下のヒゲをワックスでまとめて両端を上向きに湾曲させていた。

「あくまで噂だね。サーフェス殿の容姿や物腰を考えると、男女問わず愛される御仁であることに疑問の余地はなからう？」

「はい、異論ありません」

うむ、と上司の領きで会話は終わったが、騎士団のことを含め、問題に発展しないことをお互い願うばかりだった。いかんせん、人間関係において恋愛沙汰が一番拗れる。

書類をまとめたユージンは、ギルド職員に内容を確認してもらってから会議室へ向かった。絨毯が敷かれていない廊下は石がむき出しで、コツコツと足音が鳴る。窓から入り込む風が、ユージンの茶色のクセ毛を揺らした。陰に入ると少し肌寒い。

「会議室」とプレートの入った部屋を見つけ、足を止める。失礼します、と木製のドアを開けると、二十名ばかりの視線がユージンに集中した。物々しい雰囲気と頬が引きつりそうになるも、まずは挨拶から、と声を張る。現場ではいつもそうしていた。

「物資の管理を任されているユージン・エウフライノーです。よろしく願います！」

部屋の中央には大きな木製のテーブルがあり、地図が広げられていた。

中心になって話を進めているのは、「青き閃光」のリーダー、サーフェスだ。他のパーティーリーダーも集まっており、椅子に座って経緯を眺める者、地図を覗き込む者と様々である。

サーフェスの隣で椅子に座っていた獣人のネオが、あ！とユージンに指差す。

「オマエっ、魔も」

全てを言い切る前に、サーフェスがネオの口を塞いだ。

「口には気を付けなさいと言っているでしょう！ 邪魔をするなら外へ出てください！」

そのまま有無を言わず、会議室から蹴り出す。先日ホテルで会ったときとは違い、乱暴なサーフェスに一瞬ユージンは面食らった。

（こういう一面もあるんだ）

ギャップを目の当たりにして新鮮さを感じる。

ドアを閉めたサーフェスは、姿勢を正してユージンと向き合うと非礼を詫びた。

「仲間が不穏な言葉を使つてすみません」

いくら特級クラスのパーティーに所属しているとはいえ、貴族に無礼を働いてもいいという話にはならない。ユージンが気分を害せば、不敬罪が適用できた。

前回もその場で謝罪するべきだったが、言葉の意味を知るほうを優先してしまったと、過ちを重ねて謝られる。

「僕は大丈夫です。あの、よければ意味を教えてくださいませんか？」

「会議が終わったらお伝えします。現状、影響があるのはネオだけですから、気にする必要はあり

ません」

今回集められた冒険者を統括するサーフェスが言うのだから、と頷く。

書類を片手に、ユージンはテーブルに広げられた地図を覗いた。砦から出発した矢印が、魔物が生息する森の手前で三つに分かれているのを目にする。

「部隊を分けるんですか？」

「はい、分かれた先に群れの生息地があります」

森には、先立つて調査隊が派遣されていた。

調査の結果、スタンピードが懸念されるくらい、森の浅いところで魔物が集まっていた。その情報をもって、討伐時における群れの規模が予測されている。

同行する補給部隊は森へ入らず、手前で待機するようだ。

「なんだあ？ 気に入らねえってのか、ああ？」

テーブル付近にいたスキンヘッドの男に凄まれる。頭には獣の爪痕があった。

「いえ、僕は門外漢なので是非はありません。大まかな流れを把握したかったです」

ユージンの仕事は彼らが気兼ねなく戦える場をつくることであり、作戦の立案ではない。土地勘もないのに、そんな大それたことは頼まれても無理だった。

「補給路もお任せします」

いつもなら補給部隊も管轄内だが、自分はよそ者でしかない。できることは限られていた。

「おめえ、何しに来たんだ？」

「融通できる物資を伝えるために来ました。日持ちしない食物を渡されても困るでしょうから」
今しがた、まとめたばかりの書類をサーフェスへ渡す。

サーフェスが一通り確認すると、書類は補給部隊を担当するパーティーへ預けられた。ユー진은、今後、密に打ち合わせることになる相手の顔を覚える。

スキンヘッドの男も他の人たちと一緒に書類を覗き込むと、内容に顔を顰めた。

「おいおい、これっぽっちの回復薬の量で、魔物が蔓延^{はびこ}る森へ行けつてのか!？」

「どれだけ足りませんか？」

「この六倍は必要だつての！ なぁ！」

男は声高に周囲へ同意を求める。

経過を眺めていた者たちは、そうだと一様に頷いた。

サーフェスは何も言わない。

(……どうやら僕は、試されているらしい)

王都からやって来た、新参者。

それも仕事が終われば帰る人間だ。求心力がなくて当然だった。

会議室に集まっている冒険者の顔を一人ひとり確かめる。不安そうにしている者はいない。

(うん、良い雰囲気だ)

サーフェスの指揮が良いのだろう。

物資に余裕があることや、騎士団から横槍が入らないのも影響していそうだった。

気が緩みすぎていると危険だが、そこは現場に長けた冒険者。しつかり締めるところは締めていた。

緊張感が漂う中で、はつきりと口にする。

「僕は弱いです。森へ入ったら自分の身を守るのも難しいでしょう」

「見りゃわかるよ」

王都のヤツらは皆、オマエみたいに貧弱なのか、と嫌な笑いが起きる。

けれど事実だけを口に出しているユー진은気にしなかった。

「それでも僕は皆さんと一緒に皆にいます。わざわざ王都からやって来てまで。どうしてか？ 皆

さんが、より安全にことにあたれるようサポートするためです」

「だったら、もっと回復薬を用意してくれるんだろうなあ!？」

「いいえ」

「言ってることと違うじゃねえか！」

スキンヘッドの男が、怒鳴りながらドンツと拳をテーブルへ叩き付ける。

その迫力に、肩が跳ねた。びっくりして心臓がドキドキする。

ユー진은胸に手を置いて、気持ちを落ち着かせた。

(大丈夫、話は聞いてもらえてる)

邪険にされているなら、サーフェスがネオにしたように蹴り出されているはずだ。試されていると感じたのも、こちらの出方を窺う様子があったからだった。

小さく息を吐いてから、口を開く。

「違います。書類に書かれた数字が、皆さんをサポートするために出した最適解です。それより少なくとも、多くてもダメなんです。荷物が増えることで生じるリスクは、皆さんのほうが熟知しておられるでしょう？」

そして補給部隊が攻撃を受けないとも限らない。邪魔になったら、真っ先に切り捨てるのが物資だ。補給部隊が物資を失ったとき、皆にも備蓄がなければどうなるか。色んなリスクを加味した上での数だった。

安全策ばかりとって、現場が危なくなれば本末転倒なので、冒険者一人に渡される回復薬の量も吟味している。ギルド職員にも確認してもらった。

「ああ言えば、こう言いやがって！」

「これが僕の仕事です」

事務、というのは危険がない仕事だ。数字とにらめっこし、格闘する相手は書類である。こうして凄まれ、脅されるのは稀だった。

怒気を孕んだ男が眼前に迫る。お互いの鼻先が付きそうな距離で睨まれ、反射的に体が竦んだ。怖いものは怖い。胃がキリキリと悲鳴を上げる。けれどユージンには、最も恐れるものが他にあった。

（僕の決定が、この人たちの命を左右するかもしれない）

上司から最初に教わった訓戒だ。

——自分たちの平和が、誰かの犠牲によって成り立っていること。

——責任を持って数字を扱うこと。

自分の出した答えが励みにもなれば、足を引っ張ることもなるのを、忘れてはいけない。

鎧のメンテナンス一つで、命を取り留めることもある。だから必死に書類と向き合い、管理するのだ。安全に絶対はないからこそ、少しでも可能性を高められるよう努力する。

そして冒険者たちが魔物討伐の専門家なら、ユージンは裏方の専門家だった。

自負を持って、正面から男の目を見つめ返す。

ふんっ、と男は鼻を鳴らして退いた。

「あーあ、やる気が削がれちゃった。もう帰っちゃうか？」

町へ引き上げるか、と男は仲間と話す。

ユージンに止める権限はなかった。

「ご自由になさってください。あなた方には、その権利があります」

「あ？」

「冒険者は特別な存在です。国ですら、あなたたちを縛れない」

「青き閃光」のように特級クラスともなれば貴族が囲い込もうとするが、これは特例だ。しがらみは当然あるものの、原則的に、冒険者は自由だった。

それを保証しているのが、冒険者ギルドだ。

王都のように距離を置いている町は少なく、どこも冒険者ギルドと深い繋がりがあある。無理を通

せば、相応の反動があつた。冒険者によつて保たれている平和がなくなれば、市民だつて黙つてはいない。

「ここにお集まりの皆さんは、自由の対価を払つてこられた方です。自分の命を懸けて、権利を得られている」

自由には、責任を全て自分で負わなければならない代償が伴う。国に縛られることで守られることのほうが多いくらいだ。

(僕には、とてもできそうにない)

温室育ちを否定できないユージンは、対価を払つてまで自由になりたいと思つたことはなかった。安全が確保された場所で、のんびりしたい。

「僕ができるのはお願いだけです。どうか、スタンピードの対処にご協力ください」

町を守ってください、と頭を下げる。

返ってきたのは大きな溜息だった。

「はぁ、んなこたぁ、お願いされなくてもやるつての！ オレたちの町だぞ！」

帰ると言つたのは、どの口か。

口先だけだとは思つていたけれど、前言を撤回されてほつとする。

自由を謳歌する冒険者も、社会で生きていくにはしがらみを切り離せない。集められた冒険者が、町を拠点に活動しているとすれば尚更だ。

サーフェスが隣へ来て、ユージンの肩に軽く手を載せる。

「さあ、本題に入りましょうか」

「はい、よろしくお願いします！」

及第点は得られたようで、頬が緩む。

補給に関する話し合いは順調に進んだ。

会議が終わる頃には、ちょっとした高揚感に包まれていた。熱い議論に交されるのは、仲間と認められたようで嬉しい。

(まあ、僕は可否を答えたくらいだけど)

結局のところ、よそ者にできることは少ない。物資に関すること以外、ユージンが口を挟む場面はなかった。

解散する中、あとから「赤眼のドウキ」と名乗ったスキンヘッドの男にバシッと背中を叩かれる。赤眼というわりに、目は茶色かった。

「頼んだぞ」

「はい、頑張ります！ わわわっ」

離れ際、わしゃわしゃと頭を撫でられた。自分の茶色い髪に視界を遮られる。

「気に入られたようですね」

「あ、サーフェスさん」

手ぐしで髪を直しながら答える。

（そういえば、会議が終わったら「魔物の使い」について教えてもらうんだった）
あまり大つばらに話すことではないのか、サーフェスは人がはけるのを待った。

ユージンは隣に立ちながら、失礼にならない程度に容姿を観察する。美形は兄妹で見慣れているはずなのに、彼には独自の魅力があり、つい視線が引き寄せられるのだ。

（活力が溢れてるっていうか）

一見すると中性的で線が細いように誤認するが、すぐしかりと芯が通っていることに気づかされる。服の上からでも鍛えられた逞しさ（たくましさ）が見て取れて、女性と見間違えることはない。凜々しい柳眉の下、伏せられた睫毛の間からアメジストの瞳が覗くとドキリとした。

ここまで気品と野性みが共存している人物と出会ったのは、はじめてだった。

長男のローレンスも体格はがっしりしているが、そこは公爵家の嫡男。気品のほうが勝る。

若い頃の父親は苛烈だったと聞くので、もしかしたらサーフェスと似た雰囲気があったかもしれない。好々爺とした現在の姿からは、全く想像できないけれど。

父親を思い浮かべていると、サーフェスに動きがあった。

見れば、壁に体を預ける大柄な男を除き、人がいなくなっている。

「彼は『青き閃光』の一員ですから、心配しないでください」

「あ、伺っています。リヒュテさん、ですよね？」

黒髪を短く刈り上げ、丸太のように太い腕と足には覚えがあった。

自身が壁のような男は、静かに頷く。

「青き閃光」は、リーダーのサーフェス、ネオ、リヒュテの三人からなる。

ユージンより頭二つ大きいリヒュテが、守備をしつつ敵のヘイトを稼ぐタンクで、サーフェスとネオは、攻撃を中心とするアタッカーだった。獣人の俊敏性を活かし、ネオは斥候や遊撃も兼ねると聞く。

「さて、『魔物の使い』についてなのですが、これはネオの部族に伝わる言葉だそうです。他にも『魔性の子』とも呼ばれるそうで、ある特性を持った人間に使われると聞きました」

「特性ですか……自分で言うものなんですけど、僕って平凡を絵に描いたような人間なんですよね」

これといって思い当たる節もなく首を傾げる。

サーフェスから、乾いた笑いが漏れた。

「どうやら獣人には効果観面（こうかかんめん）のようですが、会ったことがなければ、自覚がないのも道理です」

「特性は、どのようなものなんですか？」

「猫でいうところのマタタビです」

「マタタビ……」

猫が好む植物である。摂取すると酔っ払ったような反応を見せた。ちなみに同じ科のキウイに反応する猫もいる。

「えっと、害はないと考えていいんですかね？」

「マタタビですから。ただ有事の際、魔物に襲われているときなどに遭遇すると困るので、『魔物

の使い』と呼んでいるようです」

「あーなるほど」

確かに戦わないといけないときに酩酊状態になるのは問題だ。納得していると、ふいにサーフェスの綺麗な顔が近づく。

「サーフェスさん!？」

首筋に鼻を付けられ、すんすんとおいを嗅がれた。

「やっぱり、自分にはわかりませんね」

表情は至って真面目だ。

次いで、後ろからぬつと影に覆われる。

見上げた顔は、サーフェスやネオと比べると凹凸が少ないものの、精悍さがあつた。黙って話を聞いていたリヒュテが背中に迫り、頭頂部を嗅がれる。

「おれも、わからん」

二人に挟まれ、ユー진은あわあわと腕を上下させる。体を動かしていないと平常心を保てそうになかった。既に恥ずかしさで頬がカッカして熱い。

「あの、汗臭いだけですよ?」

午前中は運び込まれる物資と格闘していた。砂埃にまみれているはずだ。

離れようと横へのスライドを試みるが、サーフェスに遮られる。首筋にあつた鼻が、襟足付近へ移動していた。

「冒険者に比べれば、ないに等しい体臭です。コロンは付けていますか?」

「いいえ……」

「だからでしょうか、不純物がないように感じられるのは」

わかる、トリヒュテが同意する。

ユージンだけが、この状況を理解できなかった。

とある「青き閃光」のイタズラ心

ホテルのレストランを出て感じた視線は、既視感のあるものだった。

自分の容姿が他人を惹き付けることは、嫌というほど知っている。男も女も、貴族も平民も。

傭兵と踊り子との間に生まれ、物心ついた頃から身を守る術を学んだ。

時には人間のほうが、魔物より醜く感じることもあった。

気の合う仲間を得てから、ようやく精神的に落ち着けるようになったものの、いつになっても貴族は厄介だった。

エレベーターを待っていたのは、ホテルのスタッフと一人の青年。見覚えのない制服と、いかにも甘やかされて育った風体から、青年の正体に当たりを付ける。

面倒だったが、当たり障りのない微笑で答えた。

「はい、ユージン・エウフライノーと申します」

予想通り、青年は王都の貴族だった。家名に聞き覚えがないから、高位ではない。

茶色い髪にそばかす顔、視界があるのかわからない糸目。危機感のない佇まいには、「平凡」という言葉がよく似合う。

ただ背筋を伸ばした姿勢や所作が綺麗で、生まれの違いを見せつけられた。

顔を輝かせる様が癪に障る。こちらの苦勞も知らないで。

精通した頃から、魔物より貴族と対峙するほうが神経を使った。両親にも苦勞をかけた。夜逃げのほとんどは、サーフェスを守るためだった。

鬱々とした心情を笑顔で隠しながら握手を交わそうとしたところで、邪魔が入る。

「近寄るな！『魔物の使い』が、何故ここにいる!?」

仲間のネオだった。

ヒョウの獣人である彼は、戦闘において色んな役割を果たしてくれる。彼自身が眉目秀麗だからか、サーフェスの容姿も意に介さず、心を許せる友でもあった。

そんな友人の無礼に愕然とする。

特級クラスは、貴族と同等の権威があるとされているが、だからといって何をしても許されるわけじゃない。

だが、それ以上に気になる単語があった。

「魔物の使い」。

冒険者パーティー「青き閃光」をはじめ、町にはたくさんさんの冒険者がスタンピードを押さえ込むために集まっている。この状況下で聞き逃せるものではない。

（もしかしてユージンと名乗った青年が元凶なのか？）

冒険者の中には、「テイマー」と言って一定の条件下で魔物を従えられる能力を持つ者もいる。しかしテイマーの場合、制限が多いためスタンピードは起こせない。

ユージンは、テイマーに似た特別な能力を有し、スタンピードを起こそうとしているのか。距離を取った先でネオに理由を聞いただと、返ってきた答えに笑いが漏れた。

「要は、ネコ科にとってマタタビのような存在ということですか？」

「笑うなよ！こっちは死活問題なんだ！」

「どこがですか。周囲に脅威がない場所、それこそホテルなら問題ないじゃありませんか」

「オレに公衆の面前で醜態を晒せてのか!？」

「酔っ払う程度でしょう？それなら飲み屋でよく見かけますが」

「飲み屋は酔っ払うところだろ！素面に囲まれて、一人だけ酩酊してるなんてかつこ悪いだろうが！」

言われてみれば、かつこ悪いのは確かだった。

「で、それだけのために、貴族の手を叩き落としたのですか？」

「え、あいつ、貴族だったの？」

「見るからに綺麗な身なりだったでしょう。どうするのです、伯爵の子飼いだったら」